<1995>

●会員の皆さんへ　いま改めて…
（熊本県有機農業研究協議会会報「くまもとの有機農業」）
※4代目会長に選任
●タンザニアから天草での実践へ（情況　1995 年 12 月号）
●人類に生存の意志はありや？（月刊 緑健文化）

くまもとの有機農業

第 33 号
1995. 3 . 1

発行
熊本県有機農業研究協議会
〒862 熊本市湖東二―一―三
TEL 三六七―三五〇〇
振替 熊本 八―一八四三八

四代目会長に中井俊作氏選任される

前 荒木信悟氏の勇退後を引き継ぐ

中井俊作氏

会員の皆さんへ いま改めて…

会長　中井俊作

荒木前会長が勇退を表明された昨年の総会の時は旅先で、その後の理事会で会長に選任された私ですから、会員の皆さんと気持ちが通じていないようで落ち着かぬこの一年でした。

その上、理事の皆さんにお願いしたのは〝無理をしない運動を〟…。もともと予算の少ないこの会でこの方針ですから「この一年一体何をしたのか?」と問われても答えに窮する実情でした。

でも誤解しないでください。消極的になった訳でもなく、することがないと思っている訳でもないのです。

振り返るとこの二〇年、〝人類の生存基盤の崩壊が迫っている〟と警鐘を鳴らして立ち上がった先達の方々と共に、向い風の中を歩み続けてきた私たち。

会の基本方針のひとつ〝提携〟活動をそれぞれのグループ・団体が持続するだけでも大変でした。

この一〇年程の間に風向きが変わって、確かに有機農業という言葉は世間で認知されるようになり、有機農産物の供給ルートも多様化して（おかげで地味な提携活動は一層維持しにくくなりました）一見私たちの運動が功を奏しているのかの様にも思われますが、社会全体としては人々はより快適・便利な方向へ歩みを進めていることに違いはなく、これはエネルギー収支の面から見ると持続可能な社会作りと逆行していると言わざるをえません。

私たちの心配の種は減るどころか増えているのです。

ではこの先どうしたら良いか?肩の力をぬいて今一度、足元・時代を見すえてみたい。

幸いこの数年、韓国の趙先生や比嘉先生のEMのおかげで改めて微生物の世界を見る眼が開けてきました。

会員の皆さんの中にも御縁を得て取り組まれている方がおいでしょう。

有機農業の語源と言われる「天地に機有り」。

微生物の世界の有様はこの言葉をそのまま具現しているかの様です。

目で見にくい世界であるだけにお互いの経験、成功例ばかりでなく失敗例もちゃんと検証しあいたい。

そのことが出来るのが、この会の持味のひとつですし、そのことがいずれ大きな意味を持つことになろうと考えているところです。

荒木信悟前会長勇退

'86年第十二回県有機農業研究協議会総会から'94年二十回総会までの長期間、会長として、ご尽力頂き本当にご苦労様でした。その功績を偲んで〝荒木信悟前会長を囲む感謝の集い〟が昨年五月二十八日、水前寺共済会館で行われました。やっと有機農業も二十（はたち）になりました。

これまでに有機農業を通してたくさんの方々とお友達になり、さまざまな事を学びあいました。その宝物をそれぞれの地域や団体で又日本の農業の位置づけに活用していかなければならないと思います。

荒木さんも研究会の会長は退かれましたが、これからもご指導のほどよろしくお願い致します。

又、お身体にはくれぐれもお気を付けになって、やっぱり有機農業をやっていると、こんなに元気なんだというお手本を示して下さい。本当にお疲れ様でした。

金子道子

森連子さんから荒木氏の奥さんへ花束贈呈

情況

一九九五年十二月号 目次

【特集】農とエコロジーの未来学

工業的発想と生命の論理 …… 塩川喜信 6

農とエコロジー …… 河宮信郎 17

中国もまた穀物を海外市場に依存するのか? …… 若代直哉 27

農業におけるナショナルとインターナショナル …… 藤田和芳 37

DEVANDA運動——経過とこれから …… 野田克己 48

農・民・が・世・界・を・変・え・る

「農」の突破口は何か「農民連合」の闘い …… 宮本重吾 58

◎タンザニアから天草での実践へ …… 中井俊作 66

新しい社会システムを求めて …… 山下惣一 76

'95. 9月はじめ編集部から原稿依頼を受けた時に「原稿料はいりませんから」とこちらから口にしました。10月にはいって執筆にかかり、中旬の〆切日を頭を抱えて過ごし、25日には「デッドラインを越えた」と言われ、徹夜…脱稿してFAXで送信したのは27日だったでしょうか。11月17日、2度目のタンザニア行出立の前日、出来上がった雑誌「情況」が2冊送られてきました。その内の一冊をタンザニアに持参しNさん夫妻に差し上げました。

農民が世界を変える

タンザニアから天草での実践へ

中井俊作

※ 出版社の名誉のために一言書き添えます。

文中に訂正の所が目立つのは執筆者本人校正をする時間がとれぬ程原稿提出が遅れたためで出版社の落度ではありません。もっぱら中井の遅筆が見苦しくさせました。

中井 俊作

はじめにNGO「地球緑化の会」を紹介しておきましょう。熊本の有機農業運動での仲間Tさんが一念発起して砂漠化の進行するアフリカの緑化を思い立ちました。英語が通じ、政情も安定しているということで東アフリカのタンザニアが選ばれ、九二年秋に会として発足しました。その時点で私も誘われ運営委員に加わりました。会の目的は人間活動によって荒廃した自然生態系の復活、居住する人々の自給自足自立を有機農法的手法（お金のかからない方法）でお手伝いすること、そのことを通して日本人の生き方を問い直そうというものです。

現地スタッフとして加わったのは青年海外協力隊OGで在住二十年余、タンザニア国籍も取得したNさん夫妻（御主人はタンザニア人で農業指導員）。来春は帰国して郷里の八ヶ岳山麓で百姓修行に励みたいというH君は在タン二年の駐在員、既にスワヒリ語を身に付け、現場に出るのが性に合うという頼もしい青年です。現地事務所はタンザニア中央部、新首都として建設途上のドドマ市にあり、周辺の半乾燥地域で進む〝砂漠化〟（牛・ヤギの過放牧、薪炭用樹木の過伐採などによる）に対処しようと林畑共生の実験農場を現地の村人と力を合わせて手作り中です。

タンザニアについても少し触れておきます。十九世紀中葉アラブからは奴隷として人を奪われ、十九世紀末よりドイツ、第一次大戦後はイギリスの植民地として収奪を受ける。一九六一年独立、共同体的社会主義路線を歩み八〇年代半ばに経済を自由化、九二年に複数政党制に移行。百二十余の民族間に抗争は見られず、最貧国とされるが国民の識字率は八〇％を越え、アフリカの中では最も安定した国のひとつ。熱帯雨林から半乾燥地帯までを含む国土は日本の約二倍半の面積。人口は約二千六百万人（九三年）、労働人口

の九割近くが農業に従事。公用語はスワヒリ語、英語。

ついでに私の自己紹介

このままでは人類は破局を迎える、という危機感にとりつかれてしまったのはいつ頃からだったでしょうか。東京に生まれ育った事、体が弱かった事などが影響していたかもしれません。自給自足でき、政治家として危機に備えられる仕事ができれば、とも思いました。大学で理工学部を選んだのは科学技術の用いられ方が人類の命運を決する、と考えたことにもよりますが、大学紛争の折にバリケードの内側にはいったり……、エンジニアとしての素養は身につきませんでした。

父の縁故で入社した製鉄会社を三年余で退き、本籍地の天草に移住Ⅱ世帯（家、田畑山林あり）。戦時中に祖父が翼賛代議士を一期つとめていたこともあって、その年（七二年）の暮の衆院選に出馬、九千余票。郷に入れば郷に従えの選挙で五千万円を越す費用を深く反省。その三年後に父が急逝。翌七六年、隣接の天草の中核都市・本渡市長選に立候補（誰にも相談せずに告示日に一人で届出を済ませた辻説法選挙で費用二十万円、供託金は戻ってきた）。

この選挙で人間関係を整理、食養の知恵（玄米菜食）を支えに実験的自給自足の生活へ。同時に有機農業運動に参加（三年程日本各地の有機農業者などを訪ね歩く）。八一年結婚（製鉄所で知り合った千葉県の農家の娘）。この間、隣町の石炭火力発電所建設反対運動に参加。八二年長女誕生（自宅出産で私が助産夫）。この時期の年間生活費は約五十万円（食費予算は月に五千円、自給率九〇％程）、山林管理（下草払いなど）労賃として立木販売代金の貯金から引き落とし。八七年次女誕生（自宅出産・助産夫）。この頃、山林が地籍調査にかかり夏場は山仕事で稲作休止。九一年、地元の町に計画されたゴルフ場建設に反対して町長選に立候補、一人でハンドルとマイクを握る（この時Tさんは一日加勢に来てくれました）、費用三十万円で三分の一の得票。この頃、夫婦の〝危機〟で一時円満別居。九四年、ゴルフ場問題で町長引責辞任、再び三十万円選挙に取り組んだが三つ巴（推進派二名）となり得票は半減。

別居後、妻が郵便局のパート職員となり、現在月七～八万＋若干の農林産物収入でやりくり中。今年で稲作（約三反）十四回目。四年前より消防団員、昨年より熊本県有機農業研究協議会長（役員改選で引き受け手おらずやむなく）、農民連合・九州の熊本県世話人。

一昨年秋アメリカを回ってきました。大地の様相を見たかったのです。（デルタ航空スタンバイパス、グレイハウンドバスのアメリパス各一ヵ月で空と陸から：三分の二は待合室又は車中泊）、昨春は欧州（ユーレイルパス一ヵ月で十四ヶ国：三分の二は車中泊）、そして昨年十二月から一月にかけての二ヵ月のタンザニア行（帰路イギリスをブリットレイルパスで六日：二分の一車中泊）という次第です。

私の足どりの大筋を書きました。海外

にはこの他台湾、ソヴィエト、中国、インド、スリランカ、タイ、イラン、イスラエル（キブツ滞在一ヶ月）、韓国と出ています。かなりハードな旅が多いのですが、高校時代には三年かけて歩いて地球を一回りしたいと思っていたのですからそれにくらべたら楽なものです。いずれにしても我ママな生き方と映るでしょう（実際には選挙も旅も相当なストレスがかかって疲れ果て、たまった仕事を見ては気が滅入り、何でこんな事をしかけたのだろうと思う事がしばしばです）。

自分でもこう書き並べてみると恩返ししなければ相済まない気持になります。そんな訳でお役に立てればと渡ったタンザニアでした。

タンザニア・ドドマへ

Tさんから聞くタンザニアの村人達の様子は、自立意欲に燃えていて歓迎してくれるし話も良く聞いてくれる、関係行政機関なども喜んで協力――と、こちらの思いが素直に伝わっている印象でした。天草で日頃行政との綱引き（ゴルフ場問題など）で消耗がちの私には充分心動かされる話です。町の発展（長い目でみたら仇になるとしか考えられませんが）の邪魔をする奴、と迷惑顔で見られているより喜んで貰える所に身を置く方がこちらも余程気持が良い。アフリカの植民地後遺症を透かせてヨーロッパを眺めてみたいとも思いました。

空港のあるダルエスサラームからドドマまで約五百キロ。ドドマ直近まで予想以上に緑が多かったので、これでは仕事にならないのでは、というのが第一の印象。しかし峠を越えドドマ盆地にはいると様相が変わり、赤茶けた大地にトゲのあるかん木の茂みが散在する光景に成程。最近は雨量も減った様だとのこと。

会の研修施設を兼ねた事務所は白塗りのセメントブロックにトタン屋根。村人達の泥壁・長方形の（屋根にはほとんど平らに土をのせてある）家に比べれば〝御殿〟です。周囲はモルタルに鉄柵の塀で囲ってあります。当初計画では村外れの実験農場内に泥壁の施設を建てる予定でしたが間に合わないので急拠建築中の民家を買いとったとのこと。気が重くなる（できるだけ村人と近い生活をしたかったからです）。ドドマ市街地の外れですが電気と水道は通っている（停電と断水はしょっ中でした）。便所は水洗、但し水タンクは水漏れで不調、沈殿槽とつなぐパイプの施工ミスか排出口から蚊が湧き出てくる。おかげで（家に網戸がはまっているのが仇となり）家の中の方が蚊が多い始末。蚊取線香も焼け石に水。マラリヤを媒介するハマダラ蚊ではないようなので一安心。罹る時には罹ると開き直って予防薬（人によって若干副作用あり）の服用は二回で中止（帰国後に発症、注射と薬剤で下熱・回復、しかしイギリスで一回、帰国後二回発熱、自然治癒）。

食事は原則として昼・夜の二回（前夜の残りものがあれば雑炊風の朝食をとることも）。洗タクと昼食の炊事はメードさんに依頼、夕食は交替で自炊。メニューは昼がウガリ（トウモロコシやコウリャン、ヒエなどの粉を熱湯の中でこね上げたもの）と野菜煮などの一菜（生のピ

ーマン・オクラ・ニンジンなどを添えて丸かじりすることも）、夜は五穀御飯（白米・丸麦・コウリャン・ヒエ・粟・豆などを適当にまぜて油を入れてたく）に野菜炒め、時に味噌汁付き。果物はマンゴー、パパイヤ、バナナ、パイナップルなど適宜。

さて、Nさん夫妻やH君、協力隊OBで一足先に（林業専門家として会から派遣）現地入りしていたWさんの話を聞くとTさんの話とはかなり様子が違います。下手するとお手伝いどころか有難迷惑になりかねない。あるNGOの会議でアフリカから来た人が「本当に役立ちたいと思うなら何もしてくれるな、それより援助と称して今なおアフリカを蝕みつつある日本政府や企業の経済進出を自国内で止める力になってもらいたい」と話されたことが頭をよぎりました。村人を含め周囲からかなり金持ちのNGOと見られているらしいのです。不思議ありません、Tさんが会に寄付した中古車二台（トラックとボックスタイプ各一）を合わせて三台の車が動いているのです。電気も水道もない村に乗り入れれば、それは終戦直後に日本の農村に現われた進駐米軍のジープと同じ様に映ることでしょう。

雇ってアウ

雇って欲しい、との申し入れもあるようです（滞在中私も二回程受けました）。財源不足で給料も抑えられている公務員の課長クラスでも、現地スタッフの月額三万円（※わかりづらいので価格は全て日本円に換算した）には（他の特典で補っているようですが）はるかに及ばない様です。役人の妬みを買うかな、とちょっと気になりました。因みに事務所で雇うことになった夜警の人（暗くなる時分から夜明けまで：外の小屋で仮眠はできる）の日当が百円余、ビール一本が百円、タバコ一箱七十～八十円（バラ売りもある）、ガソリン一リットル六十五円、水くみのバケツ運び（二十キログラム）一回4円……（食料品の価格メモが見当たらず）。

事務所の戸口という戸口には全て南京錠がかけられていました。これだけでも気分は沈んでいたのに更に夜警の人を雇うと聞いて、特別待遇はしないで欲しいと反対したのですが、当地では電気や水道の引かれている程の家ならタンザニア人でも雇うようにしているとのこと。それ程頻繁に泥棒が出没し、しかも向こうは命がけで忍び込もうとする（タンザニアではつかまった泥棒は殺されるほどのリンチを受けることがあるそうな）、だから逃げるのにも必死で時に居直ることがあり危険なのだと説得されました。気持ちは一段と沈み込みました（滞在中に二度、泥棒を追い返したよとは夜警さんの弁。彼は矢頭に毒を塗った小弓と軟弱な刃の山刀を携えていました。歩けば一時間半程の所から貸与した自転車で通って来ます。身なりはいつも小ざっぱりしていて事務所に着いてから着替えます。我々は作業ズボンにTシャツです。夕食は我々と同じものをとり分けて出し、時に外で一緒に食べましたが、生野菜の丸かじりは首を横に振られました）。

Wさんの話で肩を落としたものにこういうのもあります「人々は皆さんを迎える時によく拍手をするでしょうが、中に

は拍手さえしていれば日本人は気を良くして何かしてくれるだろう、とそんな風に見られている場合もありますので気をつけて下さい」……タンザニアが少しわかってきました。Tさんは猪突猛進型の人、着眼点（例えば害虫扱いされていた白アリの役割の見直し。植林に際して従来は苗の回りの枯枝・落葉を掃き遠去けて白アリの食害を防ごうとするのが一般的でしたが、彼は専門家の懸念を押し切って落葉マルチを積極的に進め、水分蒸散の防止と肥料《＝白アリのフン》供給、の一石二鳥で活着率を見事に向上させたのです）、着想（空振りも多いが）・行動力は申し分ないのですが何分後始末が悪い。思い込みが強くて事の成就のため大本営発表（都合の悪いことを伏せる）をするきらいがある。天は二物を与えず、です。

村人の家への民泊・作業体験

雨期前の植林（十メートル間隔で様々な樹種を並木植、苗木同士の間隔は約二メートル。並木と並木の間は簡易段畑として利用＝林畑共生・土壌流亡の防止、保水力の向上、せん定枝・落葉による有機物供給）と苗木回りへの落葉マルチ作業（育苗センターに掃き集められていた落葉やせん定枝・種子をコンテナに詰め泥も交るので二十～三十キロの重さとなる、トラックに満載し運搬、施布。八時より十四～十六時頃まで連続でかなりの重労働。アルバイトに来る村の娘達苗木への施布のみ、と一緒に汗を流す）を五日間程で終えた後、実験農場作業に参加している働き者の村人Pさんの家に三泊四日の民泊に出たい、と申し出ました。

勿論、仕事を共にさせて貰いたいからで〝客〟になるつもりは毛頭ありません。客になったら〝生活〟が見えない、暮らし方が学べない。招かれた場合は仕方ありませんがそうしないと自分の姿も鏡に写らないのです。風土病などへの罹患をちょっと心配された様ですがNさんは快く仲介してくれました。

苗木へのかん水作業の戻りがけ、寝袋・雨具などを入れたザックを背にPさんの家の前に立ったのは十二月二八日。かなり緊張して過ごした四日間でした。相手を不愉快にさせないようにとの気遣いと病気やケガをしないようにとの注意からです。泥壁にトタン屋根（働き者の印だとか）の家はくぐり棒を首をすくめてくぐって、屋根の無い通路を中に挟んで左右に二間ずつ（出入口は左右共に中央に一つずつ）。全て土間で通路正面は泥壁、底部中央に水はけの穴。右側手前の部屋で水浴びをすすめられ（木の枝製と思われるベッドが一台、広さは四畳半程で他も同じ）、右奥は隅に石を三つ置いたカマド、穀物の貯蔵かご（高さ背丈弱、木の枝で編んである）があり、左手奥は粗末な木製テーブル一台と形ばかりの木の腰かけ二つ三つ。ここでPさんと食事をとりました（家族、妻と子供三人？は通路で。一緒にと言っても断られた）。

左手前は布が下げてあって良く見えませんでしたが水ガメ、ポリバケツなどが並んでいてベッドが一台。私の荷物は着いたと同時にこの部屋にしまわれてしま

いました。この土地の流儀としてNさんから聞いてはいましたがちょっとビックリ。物を出したい時に一々とりに行ったりしまいに行ったり（それをPさんがするのです）。便所は外で、崩れかけた泥壁に囲われて畳程の広さ。中央部がゆるくドーム状にふくれていたでしょうか、真中にレンガ一個程の穴があいています。夜、寝る前に初めて放尿した時、便ツボの中で突然ブワォーンと音がこだましたので、一瞬身がひるみました。懐中電灯で覗いてみると一メートル程したでウジがひしめき合っています。フン切れの悪い私は親バエがお尻にたかってきそうな気がしてとうとう一度もしゃがみませんでした（最終日に雨上がりのかん木林の中で気持良く済ませました）。

――ここから紙面を節約します――

水浴び：二十リットル入りポリバケツに半分程の水。小さなプラスチックのオケを借りて日本手拭いを濡らし体を拭く。手拭いを洗う分しか水をとり分けないからバケツを戻す時Pさんも心なしか厳心の態。

食事メニュー：一日昼と夕の二食でウガリ（多分ヒエ粉）と一菜（乾燥野菜の塩煮又は煮豆：ササゲ又は煮落花生）。水：黄濁したゴミっぽい味で、水浴びの水と同じ。食事前にはウガリをつかみ握る右手だけ洗う（左手は大便後の洗浄用）。生水だから胃酸の殺菌力が働くように小量ずつかみながら飲む。

寝場所：二晩は通路で、三晩目は雨期到来の土砂降りになったので食事の間へ避難。民泊用にとNさん（御主人）が買ってくれたヤシの葉マットの上に夏用寝袋を広げて。目を開けると星空。

照明：手のヒラに乗る小皿に油がためてあり、もたせ立ちしている芯に灯をともしたものがひとつ（Pさんが懐中電灯と雨具を見つめる目が忘れられない。物欲を生じさせて済まなかった）。三つの石の上に鍋をかけて薪の煙にいぶされながら長い木のヘラでウガリを練る。

穀物貯蔵カゴ：ひとつは既にカラ。残るひとつもヒザ高程までのトウモロコシ。直径七十～八十センチ位？　次の収穫までとてももたないという。胸が痛む。

私の持参した土産：日本手拭い二本（日本で一本九十円）、ドドマの市場で買った石けん（七十円）一本、味見程度の我家の玄米、梅干、貰いものの日本茶、昆布。

酒場：二日目の夕方案内されたのは村の社交場ともいうべき泥壁で囲まれた五十坪程の広場。二間程度張り出したヒサシの下に多分ヤギ肉の串焼き屋台（一本二円）、タバコのバラ売り、樽を並べたポンベ（粟で作ったドブロク：アルコール度は低く、見かけは全粒粉のスープ様、一杯約一リットルで十円と二十円の二種）老若男女でかなりの賑わい。Pさんに四十円渡して十円のポンベを一杯所望、残りは自由に使ってと言い置き、壁の隅の暗がりへ。二つ三つほのかなランプの灯の中に揺れ動く人々の姿を眺めつつしばしアフリカを思う。三日目の畑よりの戻りに立ち寄ったのは見かけは普通の泥の家。この日はかなり疲れが出ていて、ただもう一杯のポンベだけを励みに意地で立錐をふるう。昨日は気付かなかったがここでは回し飲みがマナーとか。

薄暗い土間に寝かせてある丸太に腰を落したら早速トナリの先客からカップが回ってきた。A型肝炎の文字がチラッと脳裏をかすめたが、ポンペを求める体の乾きがかき消した。この日はPさんが支払ってくれた。

畑仕事：初日（滞在二日目）朝六時（夜明け）出発。約五キロ離れた畑。七時着、十二時まで立鍬でトウモロコシの株間を中耕除草。濃灰色の砂質土壌は表面はパンの皮のようにクラストしているが鍬の刃が当たると簡単に砕け、雑草と共にサラサラと崩れ流れる。日射しが強く乾燥しているからこれで良い。株間は五十センチ程で二本仕立て。背丈は十～十五センチ程。作業前に途中で拾ったヒョウタンのかけらの砂を払い、オシッコをためて飲む。風土病対策の秘策！二日目は五時出発（まだ暗い）。六時着、十一時まで。帰路はPさんの足を追うのが精一杯。途中視界が真白になりかけた。そしてポンペ！（醸造する時一度煮沸しているとのことで安心して飲める―形だけ洗われた傷だらけのカップと回し飲みさえ気にしなければ）。

水汲み：掘抜き井戸まで十分ほど。ヒモの先にくくり付けた空缶を投げ込み、底の方にたまっている黄濁水をすくい手繰り上げる。深さ四～五メートル、上部の直径三～四メートル、底部二～三メートル。雨が降ればかなり回りのゴミや土砂、家畜のフン等が流れ込むと思われる。二十リットルを頭に乗せて歩くのはかなり大変。頭皮が、次いで、バケツを支える腕と肩が痛くなった。アフリカ女性の姿勢が良いのがうなづける。十歳位の子供から運んでいる。歯をくいしばり「一杯四円一杯四円」と胸中で呪文を唱えつつ……。

せんたくと薪拾い、炊事はできなかった。畑仕事も水汲みも一般に女性の仕事だが、P夫人は妊娠中で具合がすぐれず、おかげで気掛ねなく仕事を手伝えた。三日目、もし畑仕事に出ていたらダウンしただろう。その晩、トタンを打つ音高らかに雨期到来を告げる雨が降った（翌日は仕事を休むならわしとのこと）。Pさんはザックを背負い雨上がりの道を村外れまで見送ってくれた。空には昨日まで見かけなかった鳥が群舞し、ブッシュの中の大きな水たまりからは蛙の合唱。事務所まではここから約九キロ、二時間の道のりだった。

その後のドドマ

事務所に戻った大晦日の晩、日本から市民運動キャリアの長いYさん、食餌・漢方療法の大家Sさんが合流した。正月のミーティングで会のメンバーが各自二～三時間の長い自己紹介を行なった。これだけ時間をかけると各人の背景、足どりがかなりよく飲み込め、日頃の言動にも成程と得心の行くことが多い。信頼感も自ずと増す。

印象に残った言葉

T：汚い心を掃除するのに汚い所を掃除しなさい、と言われてバケツとタワシを渡された。便所掃除をさせて下さい、と戸別訪問、行く先々で断られ、とうとう手をついてお願いして受け入れて貰えた。はじめて受け入れてくれたその家で、

掃除していてポロポロと涙がこぼれた。——人から言われてしているから〝大本営〟にすぐはいる。

H：オレは金を使って生きてるだけでちっとも自立なんかしていない、ほんとに自立しているのは村人の方なんです。早く日本に帰って百姓修業がしたい。——流石に会の駐在員、その心意気だ。

N（妻）：本国ではできないことができる、できてしまう〝植民地〟での貴族生活＝そのコワサを知って欲しい。——Pさんの顔が懐かしい。

S：人間がいくら合成化学の粋を集めて努力しても自然界と同じものは合成できない。砂糖、葉緑素、血液など。

Y：自然とは自ずと然る＝安藤昌益の言葉。エネルギー収支から見ればアフリカの人百人に先進国の一人が匹敵する。人口問題を真剣に考えなければいけないのは先進国の方なのだ。

W：総論は反対するいわれのない善行と映る。しかし実行に移す時の手だてとプロセスを見るとタメにする偽善としか見えない。

N（夫）：誤解や惑乱の種（必要以上な文明の利器）を持ち込む位なら自国で政府に対する提言や民間へのアピールをして貰いたい。——公的助成金からでなく自主財源で往復旅費が工面できるような時は、身を運ばずにお金だけN夫妻に預けよう。

タンザニア、アフリカを思う

◎確かに好ましくないと思われる因習に縛られている（婚費のやりとり、男女間の労働分担）一方で失ってはならぬ伝統、掟が失われて行きつつある（食生活の知恵：穀類の精白化、粗悪な加工食品類への傾斜化……。自然への関わり方：焼畑、放牧サイクルなど）。でもこれは工業国の〝近代化〟幻想へのとらわれと生存基盤である自然破壊への無配慮と同じようなものだ。

◎生態系の悪循環（自然・農耕環境の荒廃＝砂漠化）が放置されるような無節操な社会情況の中で、成り行きに任せて現行の偏頗貨幣経済システム（環境税も導

新日本文学

No.567

特集　詩と死と二重橋に涙雨

「聖戦」を鼓舞した詩人たち　松本恭輔／沖縄から天皇制を問う　金城実／差別と天皇制　塩見鮮一郎／「物語」と「型（かたち）」　藤井貞和

創作詩　向井孝、平岡けいこ、島つなみ、白井知子、井口克己、早川純、藤永久子、作田教子、蛭間裕人、井上葦野、森川雅美、働淳、川村ひさ子

連載13回　重信川河口——小説・石田波郷　土方鐵

¥850

新日本文学会

東京都中野区東中野1-41-5

TEL 03-3362-8771

入できないような＝自然修復のコストを考慮しない）に取り込まれるのは緩慢な自殺行為に等しい（都市化はその象徴であることを銘記せよ）

◎かつての植民地宗主国は全面的に（搾取した被植民地の）環境修復の責任を自覚し、無償でその回復を計らねばならない。被支配国独立後の経済侵略についても同様（この点は日本もその責任＝アジア諸国の農林水産資源の収奪、を免れ得ない。特に森林伐採においては深刻）。頬かぶりを続けていれば必ずそのツケが回ってくる。

◎工業化を安易に考えるのも自殺行為に等しい。仮にそれを債務の重圧から逃れるための手段と考えているなら言語道断（債権国は環境修復の責を果たす第一の証しとしてその債権を放棄するのが当然）。もし民生安定のためと考えて計るならば資源・エネルギー再生可能な範囲内にとどめておかねば悪循環は必至。文明国からのガラクタに目を奪われている限り悪しき現状からの脱却は計れない。そもそもアフリカにはさしたる工業化の必要もない程恵み豊かな自然生態系があったのだ。しかもそれは現状の人類社会にあって最高・最大の財産であることは間違いない。計りごとあるとするなら恵み豊かな自然生態系の修復こそ先決。

◎〝他人〟のお世話をしようとするなら、まずは郷に入りて郷に従うべし。相手と同じ生活条件の中に丸ごと身を晒して、その上でなお自分にはこれだけのことができると確信する等身大のお世話にとどめるべき。

Pさんと共に過ごした僅かな体験をもとに、もし私がこの村で一生を送るとするなら何を手掛けるだろうか、と考えてみた。

◎サッカー（二日目、村の酒場に行く前にサッカー場に案内され村人同士の試合を観戦した。村の中に数ヶ所のグランドがある—支配者は明らかにスポーツを不満の吐け口に利用した。抑圧された側の憂さ晴らしの手段に堕しているとしか思えない）に興ずるヒマとエネルギーがあったら私なら、

一、井戸の改善：現状は公衆衛生決して好ましい情況にない。しっかり掘り抜いて回りからの雨水の流入が起きないように養生、手こぎポンプかツルベ式の井戸に改善したい。必要な資材費は皆で拠出し合って調達する。

一、便ツボの改良：肥料化とガス利用を考える。村人は下肥として利用せず（かっては便ツボはなかった様だ。大地に直接戻していたらしい。人口増と緑の減少も関わっているだろう）。一杯になったらそのまま埋めてしまうという。どうせウジがわくものならせめてニワトリのエサにでも利用する。

一、中耕除草機の開発：日本で私がつかっている手押しの水田除草機（ガンヅメ又は田押し車と呼ぶ）をもとに工夫すれば畑の土質次第では使えるかもしれない。（村にフイゴ式の鍛冶場が欲しい。この程度の手工業に金属資材を供給する製鉄・製錬所は国レベルにあって良いか）

一、村の学校での地球儀教育：人類は今まで何をしてきたか（特に階層化社会の危険性＝人が人を踏み台にする＝人が知的であろうが単純肉体的であろうが己の

能力を売るようになる)、今何をしているか(工業国=都市、が非工業国=農村を構造的に収奪している)これから何をしたら良いか(循環化社会への移行、自然生態系の修復、人口抑制……)を子供から成人に至るまで学び直す。

一、緊急の課題として過剰放牧を戒める

村人同士の話し合い、避妊知識(妊娠の仕組み—当面オギノ式の避妊法)の普及を計る。

おしまいにあたって

Pさんの夢は、飢えることなく一家団らんの生活が送れるようになること、というものだった。不足食料(穀物貯蔵カゴの中身を思い出す)を入手するためなのだろう、夜警の賃仕事に出ていると聞いたのは畑への道すがら。一晩で手にするお金は八十円! 私がPさんの家に泊り込んだということは、実は彼のその僅かな収入の手だてさえ三晩塞いだということなのだ。

情況を共有するということは難しい。しかしそれをせずにいてエコロジカルな未来など開き得ようか。現状のままでは人類は破局を避け難い。五十路を前にして天草でどう生きるかは自ずと明らかになった。実験的生活から実践生活へ。

Pさんの末娘(村での初日Pさんの帰りを待って泥壁にもたれて休んでいた時、私の回りを囲んで立ち眺める子供達の最前列でモジモジしながらこちらを見つめていた幼子、——多分あの目ヤニにたかるハエを手で払いながら笑顔を振り向けていた幼子に違いなかろう)が発熱して、三日後に亡くなった、と聞いたのはこの秋のことだった。

[なかい しゅんさく 農林業 一九四六年東京生。早大理工学部卒 「我が帰農の記」(『農業リサイクル誌』八三年八月~八五年十月号に連載)、「基本的人権としての自給農」(『書斎の窓』八七年七・八月合併号) この頃思うこと:預りもの(かつての村一番の名残で今でも山林を百十町歩所有)をこの手で社会にお返しするためにも改めて技と知恵を磨きたい。こんな地球に誰がした、と言われぬように恩返しにも努めよう。二人の娘が背中を見ている。己のすることで報酬など貰いわれはない]

-混迷の世紀末-

「今」を切りとり
「未来」の萌芽を掴みとる

人民新聞

最近号の内容

☆A級戦犯笹川良一を「市葬」にした大阪・箕面市の愚行
☆第二のオウム?ヤマギシの呆れる実態
—恐怖のマインドコントロールの体験を語る
☆元・現社会党議員のお粗末な惨状
—反核理念より大臣の椅子が大事な井上一成
☆「各地のムーブメント」・「情報広場」
「言わせて聞いて」など

▼月3回発行▼タブロイド版6ページ▼1部150円▼購読料:半年3000円▼郵便振替 00950-4-88555

ご希望の方に見本紙郵送します

人民新聞社
大阪市東淀川区西淡路1-11-19 2F
TEL06-815-1689、FAX815-2496

毎月1回15日発行　昭和39年2月20日第3種郵便物認可

月刊 緑健文化

COOPERATION & ECOLOGY　1部300円 年間3,000円

社団法人 日本協同体協会
代表 奥村久雄
〒321-12栃木県今市市栄町2083
TEL 0288-26-1219・2038
振替 00150-2-24403

日本協同体協会
緑健文化研究所(草刈善造)
〒085-11北海道阿寒郡鶴居村上幌呂
TEL 0154-65-2353
振替 02700-1-42245

人類に生存の意志はありや？

中井　俊作
(熊本有機農業研究会代表)

人類に生存の意志はありや？　ありません。

地球環境問題が生じたということが、その証しです。

環境問題とは緩慢な自殺行為です。

後始末ができないということです。

物事の因果関係を認めないということです。

思考力の放棄を意味します。

利己的自己主張、既得権執着、責任回避とその正当化など、見苦しい態度の総和です。

まったく恥ずかしいことです。

《食糧バブル》の崩壊は近い

人類が今の勢いで進めば、この四半世紀の内に破局が訪れてもおかしくありません。食糧生産の現場で相当な無理が重ねられていますが、農林水産業を他人事で済ませる人は気づきません。土地を荒廃させながらの《過剰生産》は《金融バブル》より恐ろしい《食糧バブル》といって良いでしょう。子孫に残すべき土壌の生産力（地力）を先食いしているのですから。

大規模機械化農業を進める食糧輸出国側は莫大な投資費用を回収しなければならず、生産物を何としても売却しようと貿易自由化を主張します。おかげで人々は誤解を深め、油断します。外国では食糧が安く効率的にできて、しかも余っているのだ、と。国内で減反などの生産調整が実施されるのを見聞していればなおさらです。本来その自給率の低さに顔が青ざめる程の実態であるのに。

昨年秋、アメリカの農地を飛行機とバスの窓から眺めました。〝長続きしないな〟と思いました。単調で味気無いその広さは気象の変動を受けやすいことでしょう。残念ながら印象でしか語れません。もし農地の実態を少しでも明らかにできる方法があるなら、早急に調査に取り組むべきです。食糧を輸入する以上、必須の仕事でしょう。

世界の農地が劣化の方向に進んでいることは、すでに指摘されて久しいのです。特に農薬や化学肥料を必要とする（地下水への依存度、かんがいの方法なども関わりますが）大規模機械化農業地帯は要注意なのです。人間の勝手な思惑で無理をすれば、一時的に大量生産が可能なだけに、見かけ上の《供給過剰》を現出させてしまうのです。《食糧バブル》がはじけたら、紙幣は〝紙くず〟になりかねません。なぜそのような無理な農業を続けているのか《農業》の実態も明らかにして誰もが知る必要があります。関係者の間では《常識》でも、人々が知ったら《とんでもない事実》が世の中には驚くほど多いのです。多分、その《とんでもない事実》の全てが白日のもとにさらされ、人々がそれを直視したら、人類が今何をしているか、その生存基盤がどれほど蝕まれているか理解できるでしょう。人々は自分自身がどのような立場に立たされているかにも気づくはずです。誰もが逃れようもなく加害者であり被害者であったことに。残された道が限られていることも知るでしょう。恨んでも責めても問題は解決しない。実効ある行動を積み重ねるのみです。

人類の誰一人として、環境問題の発生など願っておりません。ではなぜ、こんな愚かな事態を招いてしまったのでしょうか？

答えは簡単、明瞭です。個人的にも社会的にも、愚かな事態を防ごうという《意志》がなかったからです。裏打ちする行動の伴わない期待や願

望は《意志》とは言えません。でも本当に不思議ですね。生命ある存在として最も肝心な《生存》の意志が、こともあろうに人類において働かないというのは。《考える》能力が仇となっているとしか思われません。だとすればこれは、不思議というより皮肉で深刻な事態です。

考える力が仇となった？

いいえ、考える力が仇となった訳ではなく、考える力を仇にしてしまったのです。改めて考えてみて下さい。なぜ環境問題が生じたのか？史上幾多の文明が興っては亡びました。外敵の侵入など直接的原因は様々であったにしても、〝文明の跡に砂漠があった〟という表現に象徴されるように、森林伐採による土壌の荒廃がその背景にあったことが既に指摘されています。

今日の地球環境問題と重ねてみて下さい。何と構造的に共通点が多いことか。違うのは過去の文明が地理的、民族的に限定的であったのにくらべて、今日の文明が地球規模の広がりを持った、種としての人類共有の問題にまで行き着いてしまったということです。

過去の人々の失態から教訓を引き出せないとするなら、我々人類に思考力があるなど言えたものではありません。生きた教訓を導き出せないとするなら、百万巻の経典に何の意味があるでしょう。歴史を文字に残し、意志を伝達するはずの言葉に何の力があるでしょう。より幸せな人生を求めて築いてきたはずの文明にどれほどの価値があるでしょう。

アイヌやアメリカインディアンは自動車や冷蔵庫を発明しませんでした。しかし彼らは大地や大気を損ない、汚すことはしなかった。

その彼らを未開の民として先住の地から追い立て、誇りを奪い、生活を破壊したのは誰だったか？　彼ら、先住民族と言われる人々はいずれも都市文明を築きませんでした。しかし地上にあるものをあるがままに受け入れ、自然と折り合いをなして生きる深い智恵と技術を磨いていた。そこには人為及ばぬ《大自然》に対する祈りがあり、形容詞無用の自然淘汰を生き抜く誇りを伴う意志があった。〝命がけ〟を支える愛と信頼があった。

その彼らのもとに文明化を唱え、銃と法律を盾に登場したのは誰だったか？　アルコールで彼らの魂を抜き、相手を信ずる姿勢を逆手にとって一方的な契約書にサインをさせたのは誰だったか？

《愛と公平》とを日々の生活の中で見事に実現していた彼ら。その彼らの生活を打ち砕いたのは、実に、その《愛と公平》こそを求めて法律の作成に衆知を集めていた我ら《文明人》であったのです。違いますか？

先住の人々は言葉を用いても文字を必要としなかった。言葉はその伝えるべき意味を実現する手立てそのものでしたから、残す必要がなかったのです。言葉には責任と行為が伴いました。そうでなければ社会的に生きている意味がない。自らの口を出た言葉は実行する、実行できないことは口にしない。それが誇りであり、誇りを失うことは社会的な死を意味しました。言葉がすなわち生命でした。そうでなければ己も、そして種族の生も保てない。自分たちが生きる大地との間の適度な緊張関係がそうさせたのでしょうか。いずれにせよ人は信じ合うのが自然の生存でした。（あらためて「信」なる漢字の成り立ちを思わずにいられません。まさに「人の言」なのです）

従って、言葉を用いて考えるということは、生き方を練る＝生の切磋琢磨そのものだった訳です。

実現できない《愛と公平》を百万巻の経典に盛り込み、実行しない《責任と義務》を法律に明文化しても、それが考えたことになるでしょうか？　これっぱかしの勿体もつけずにシャカやキリストの想いを実現していたのはどちらでしょうか？

都市を築き、その中に教会や神社仏閣を建て、法律を作成・執行する官庁を連ねる一方で、環境破壊を止めることもできない我ら文明人！　文明の利器を振り回し、その便益の上にアグラをかいて自らの首を絞めるような事態を招く人々。それは野蛮人と呼ぶべきではありませんか。

どうやら言葉を文字と化し、文章として明らかにしたことが仇となったようです。北極星を指し示す姿を見て、北極星を見ようとせずにその指先ばかりを見つめることに浮き身を費やす我ら文明人！

私たちは言葉を文字に残すことで言葉の力を奪い、結果的に思考力を失ったも同然の事態を招いてしまったのです。考えたつもりで考えたことにならなかった。

地球環境問題が現代文明の正体を割ってくれました。自動車があっても燃料が使えなければ役に立たない。冷蔵庫があっても中に入れる食物がなければ意味がない。これでは考える力を仇にしてしまいます。

なぜこんな事態を招いたか？

ちょっと乱暴な表現を許して下さい。人が自分の才能を〝売った〟からです。〝メシの種〟にしたからです。しかも高い才能ほど高く売れると臆面もなく主張したからです。

言葉が文字に化けた時にその力を失ったように、人の才能もお金に換算された時、その信頼性を失いました。

才能は陽光や空気、土や水が生命を育んだ結果生じた生命の表現力です。自然から恵まれたもので自分のものではありません。役立ってこそ生き生きとしてその存在を明らかにします。お金に換算した

ために利己心の影がつきまとって見られるようになりました。下心がチラつくような話に誰が心からの納得を寄せるでしょうか？

行動に裏打ちされない言葉の用い方＝文字の使用が不信の構造を築いた上に、利己心の充足を許すお金の用い方がその不信の構造を一層強化しました。建前と本音が食い違うのが当然です。

考える力をこそ高く売りつける。これが今日の文明の正体です。どんな結末を招くかは言うまでもないでしょう。

《事実》が自分に都合の良い部分だけ目に映って自己正当化に用いられる。意図するほどの悪意がなくとも、力を失った言葉の積み上げの結果は大差ありません。

現代文明が地球環境問題に直面するのは必然的なことでした。今日までの人類の歴史は語ってくれます。言葉やお金の用い方を誤れば、いかなる宗教もどんな社会体制も人々を救ってはくれないことを。民族、国家、洋の東西に関わりません。

もともと一人一人の生命の証し方の問題なのです。自然の一部分として生命を恵まれた自分が、そのことを自覚し、どう実践するか。自分の才能を通して生命を目いっぱい生き生きと表現するかどうかなのです。生きるのに必要なものさえ得られるならば、己の才能を活かすのに報酬を求めるいわれはありません。

生命の誇りを取り戻す

《生きるのに必要なもの》とは一体どれほどのものでしょう？　今、この地上で生を受けているもの、微生物の世界から人類の暮らしの実情に至るまでを見渡せば自ずと程々がわかります。

少なくとも環境問題を引き起こした人類としては（その一員である自分が生命の誇りを取り戻すには）それに見合う証しが求められています。自分の才能を自覚する分だけ他の生命を損なわない、という生き方です。

有能な人ほど少ない報酬で身を処する。才能に恵まれるということは、それだけ生命を活用する力がある。お金を必要としない。お金はハンディのある人へ回す。そういうことではありませんか？

万物は人間のためにあるのではなく、人間が学ぶためにあるのです。人が人として生きるのに恵まれた《考える》力を、より一層磨き高めるために。すべての生命と共に生き生きと生命を全うするように。

私たち人類の手は武器を取るためにあるのではないし、経典を振りかざすためにあるのでもない。日々の命の糧を潔く手にするためにあるのです。

言葉足らずで誤解を招くかもしれませんが、私はいまさら現代文明を否定するつもりはありません。科学上の発見、文明の利器の発明も人類の歩みの必然であったと思っています。

しかし地球環境問題の発生は、その人類の努力の成果をすべて無意味なものにしかねません。この先のことは、人類の構成員である一人一人の《考え方》次第です。

文字にしてこのようなことを書きつづった私自身、自分の問題として直面しています。この二カ月間、原稿を持ち歩き、書きあぐねた揚げ句、とうとう海を越えて、アフリカのタンザニアまで来てしまいました。今、ダルエスサラームのホテルの一室です。間もなく内陸の都市、ドドマに向けて出発します。何しに来たか？「地球緑化の会」というボランティア活動の一環で、タンザニアの小さな村の人々の食糧自給のお手伝いです。これさえ為替相場という現代経済社会のまやかしの上での、余計なお節介になりかねないことですが……。

付　記

以上の文章は右にも記しましたように、タンザニアにおいて書き上げました。

そのアフリカ・タンザニアのことですが、案の定、余計なお節介どころか、迷惑な破壊に加担しかねない立場を改めて自覚して戻ってきました。本紙第三三四号（九五年二月号）「人間は文明をやめられるか」第六回で中島正さんが指摘された通りです。

数年前、熊本でNGO関係の国際会議に参加した折に、アフリカのパネラーがはっきり口にしました。

「皆さんは気を悪くするかもしれないが、本当にアフリカの役に立ちたいと思うならば、何もしてくれない方がよい。それより援助と称して今なおアフリカを蝕みつつある日本政府や企業の経済進出を自国内で止める力になってもらいたい」

それを承知で関わろうとする私達。どのようなことをしようとしているかは、改めて報告の機会を頂くつもりです。

中井俊作さん（農林業）

昭和二十一年（一九四六年）、東京に生まれる。昭和四十七年（一九七二年）、父の郷里・熊本県天草に移住。数年にわたる全国行脚を経て、農を中心にすえた実験的簡素生活の道に入る。現在、食料はほぼ自給自足を達成。

この間、地元を中心に多数の市民団体の活動・運動に参加。熊本有機農業研究会代表。農民連合九州世話人。この夏の参議院選挙には農民連合から立候補の予定である。

〒八六三―二四　熊本県天草郡五和町大字井手二六四六
☎&FAX　〇九六九―三四―〇〇五四